

【茶の湯釜】

＝釜のはじまり＝

茶の湯釜が、茶席において重要な役目を果たしていることは周知のことである。しかし、他の道具に比べて製作年代や、作者など不明な部分が多い。その上、茶碗などは、形姿、葉、焼き上がりなどが見所であるが、釜になると、主体の釜だけでなく、鑲付、蓋、風炉などの付属の部分が多く、それらの説明も付けないと、釜の本態が見えてこない。また文献等が少ないことからわからない事が多く、真形釜という釜が忽然として出現することも説明が難しい。

釜の始まりは、どんなに早い時期に考えても、鎌倉時代をでないと思われる。喫茶が栄西禅師により中国から日本に伝わり、鎌倉時代になり盛んに茶を飲んだことは文献によりわかっている。この喫茶のための湯を沸かす釜が茶の湯釜のはじまりでありが、初期の釜がどんなものであったかは定かではない。芦屋釜の真形釜あるいは天命釜の甑口形式の釜がその初期であったとする証拠の文献も銘文もない。釜の形式、鑄出文様、その他絵巻物に見る風俗画等によって推測する以外にない。鎌倉時代から室町時代末期まで流行した芦屋釜、または天命釜にも、製作年時を明らかにした作品があるが、まことに数が少なく一貫した説明には役立たない。釜の制作者も他の工芸品に比べると資料的に少なく、また伝来のおもしの強い世界であるために、多少の訂正も難しい部分がある。

茶の湯の釜は、銅製のものも稀にはあるが、ほとんどが鑄鉄である。日本の鑄鉄の工芸品としては最高に位する優秀なものであるが、その製作方法は、割合に原始的で、弥生式文化時代の銅鐸の製作技法とあまり異なっていない。

＝茶の湯釜の形態と名称＝

茶の湯の形態は、その歴史を見ても千差万別である。しかし、使用することを目的とするため、その形には相当の制限がある。その限られた範囲の中で、茶の湯釜の形式が生まれる。

釜の名称は、主に次の三通りに分類することができる。

- 一、 形姿または使用からくるもの
- 二、 装飾文様または文字によるもの
- 三、 伝来によるもの（所持者、所在地、個人の好み等）

ただし、それ以外に説明のつかないものが、古い文献に出てくることがある。ここで釜の名称を分類してみる。

形姿または使用によるもの

真形釜（しんなり）	芦屋釜の古い形式で、筆跡の書体でいえば楷書にあたるもの。
鶴首	首の長い形から来る。
責紐（せめひも）	天命釜に多い。貴人に献茶のとき、封印するために、口縁に近く鑲付がある。
のんどり	漁獵具の形から。
篋被（のかつき）	篋被とは、矢の鏃が竹に接するところの名。釜の胴の下部が毛切のあたりに飛び出した形が篋被に似るところから。

切合 (きりあわせ)	切懸ともいう。風炉にかけてその口を切り合わせる場所より。
広口 (ひろくち)	口の広いもの。『筌蹄』には「古作に多し道安好み、与二郎作にて輪口と姥口」とある。
皆口 (みなくち)	釜の上部がすべて口という意か。『筌蹄』には、「天猫よりあり」とある。
姥口 (うばくち)	口作りが齒の抜けた老婆の口に似たるゆえ、とある。
十王口 (じゅうおうくち)	十王の冠に似て、輪口の上の少し開いたものか、甑口、輪口釜の一変形。
繰口 (くりくち)	口の外側面が繰り取った形に似て、くびれて、外側に曲線をつくる。
丸釜 (まるかま)	丸形。『筌蹄』に「利休形、与二郎作、輪口、唐金蓋、鬼面鑲付」とある。
筒釜	筒形。
尻張 (しりはり)	一名、障泥かま。底が少しふくれている。
日の丸	自然と丸くなる。
四方 (よほう)	四角形の釜。
裏甲 (うらこう)	炒り鍋を打ち返したもの。
立鼓 (りゅうこ)	瓢箪をさかさにした形。
播座 (るいざ)	『筌蹄』に「元伯好、(中略)クリ口、累座」とある。
唐犬 (とうけん)	特殊な耳の形で、犬の耳に似る。
富士 (ふじ)	富士形。
角釜 (かくかま)	四角形。『筌蹄』に「原叟好」とあり。
八角 (はっかく)	八角形。
鍋釜 (なべかま)	鍋の形をして浅い。
荷葉釜 (かよう)	蓮の葉の形をする。
達磨釜 (だつまかま)	そろばん珠の形。
柘釜 (ますかま)	『筌蹄』に「利休形、四方釜の肩が落ちずに、羽落籠被にならざるなり(下略)」
平蜘蛛 (ひらぐも)	蜘蛛がはった形で平らである。
平釜	平らな形。
車軸釜 (しゃじく)	車の甑を釜にしたもの。本来は車軸というものは心棒で、釜にならない。
矢筈釜 (やはず)	断面が矢筈のような形。矢筈は、矢の頭で弦にかけるためにくぼんだところ。
田口釜 (たぐち)	口が肩より低く付いて口の廻りに溝ができ、水を入れたら田の面のように見えるから。
九輪釜 (くりん)	塔の九輪では釜にならない。九輪の心棒を釜にしたもの。
乙御前釜 (おとごぜ)	お多福に似て豊かな形。
重餅釜 (かさねもち)	餅を重ねたような形。
布団釜 (ふとんかま)	布団のようなふんわりとする。平釜より丈が高く、胴ふくらむ。
兜釜 (かぶとかま)	兜の形。
茶飯釜 (ちゃめしかま)	茶をたてる以外に飯を炊いたためにつけられた。口作りは皆口で、大きな蓋の中にまた小さな蓋がある。使い方によっては蓋の取り方を異にする。
手取釜 (てどりかま)	注口のある釜に三足をつけ、鑲付は上張でこれに弦を付ける。
一文字釜 (いちもんじ)	肩の上部が一文字に水平になったもの。

肩衝釜 (かたつき)	肩のかどのところが突き出ているもの。肩の上部は平らになる。
からげ釜	遠州好、俵形の胴に縄をからげたように紐を鑄出した形。早桶釜の別名あり。
尾垂釜 (おだれ)	一般には、胴の下部が不規則に欠けている釜をいう。芦屋・天命の古作に多い。
透木釜 (すきぎ)	炉団の縁に掛けて使う。平らな形。

装飾文様または文字によるもの

霰釜 (あられかま)	霰地文ちらすゆえ。
霰釜 (みぞれかま)	霰より小粒のゆえなり。
雲龍 (うんりゅう)	雲にのる竜文。与二郎作に多いといわれる。
巴釜 (ともえかま)	巴形文様のために。
政所釜 (まんどころ)	菊と桐とを併せた文様をつくる。
立田釜 (たつた)	鶏が蹴合いしている図。これに立田川の楓樹と流水を加える。
腰万字 (こしまんじ)	原叟好で、丸釜の切懸け腰に万字形がある。
千鳥釜	千鳥図。
七福人釜	七福人図。
春日山釜	春日山と神鹿図。
十徳釜	茶の湯十徳を表す四言絶句の文字を鑄出する。 「諸仏加護、五臓調和、孝養父母、煩惱消除、寿命長遠、睡眠自除、息災延命、 天神随仏、諸天加護、臨終不乱」
百侘釜 (ひやくだ)	原叟好、「百侘」の文字。
雷声	「雷声」の文字。
大講堂 (だいこうどう)	比叡山延暦寺大講堂の香炉の形を釜に用いたもので、「大講堂」の文字。 その他文様によって命名するものはまことに多い。

所持者、所在地、伝来等によるもの

百会 (ひゃっかい)	利休百会に用いる。『筌蹄』には「天命作の名物釜」とある。
地藏堂 (じぞうどう)	尾州地藏堂常住の釜、天命の透木釜という。
東陽坊 (とうようぼう)	真如堂東陽坊に利休所持のものを贈られたゆえ。天明の筒釜という。
阿弥陀堂 (あみだどう)	『筌蹄』には、「利休、此の釜の大の方を有馬阿弥陀堂へ好み遺す」とある。 利休好で、与二郎がはじめて造るといふ。阿弥陀寺の住職の頭に似るとも いわれ、猪頭釜の別名あり。
国師釜 (こくし)	春屋国師の所持、与二郎作と。
万代屋 (もずや)	万代屋宗安所持と。
針屋 (はりや)	『筌蹄』に「針屋宗春所持。芦屋作、コシキノ内雷紋アリ、鑲付遠山」とある。
油屋	油屋浄由所持と。
達磨堂	覚々斎原叟が高桐院の達磨堂の香炉を釜としたもの。
野溝釜 (のみぞ)	野溝氏所持のもの。猿候捕月図をつくる。

前にも述べたように、茶の湯の名称で、この分類の中に入らないもの、また意味の不明のものもある。

これらの釜の名称は、製作当時の名ではなく、桃山、江戸時代に茶の湯がさかんになって命名されたものが多い。しかしいずれの茶会においても、主に用いられた釜は比較的に素朴、無文の釜が多いようである。また釜の形姿でも奇抜のものは少ない。

釜の名称が多いことは、また釜の形姿が多岐にわたることを意味するが、釜のオーソドックスな形のもが真形釜とされている。しかし「真の釜」と称したのはいつ頃からであろうかわかってはいない。

口作り

茶の湯釜の口は普通一つである。まれに二つ口の釜もあったことが記録に見られる。その口の断面は、円形が大部分で、釜の中央についている。円形のほかには、三角、四角、六角等がある。古作の釜はほとんど基準形の円形であるが、時代の降下によって、変形のもが造られた。

口辺の立ち上がりについては、口の断面の場合と異なり、変化があって、大体次のとおりである。縁口—筑前芦屋釜に多い。肩からの線が頸で一度くびれ、上方に向かって外側に傾く。頸でくびれるので、縁口という。

甑口—口作りが甑に似ているので、その名がある。鎌倉時代の仏具の火舎香炉は蓋と身との間に甑をつけるものが多い。

輪口—口の廻りに輪をめぐらした形のもの、桃山時代以後に多い。

姥口—歯のない老婆の口に似た形。肩の線より口辺の線が低くなって曲線をつくっていくのが普通だが、折ったように直接的のものもある。これは折口、または折入口というものか。

この他に、鯪口、矢筈口、十王口などの名の口作りがある。なお、古いものの方が口は大きい。

胴の形

胴の形は一般的にはその断面が円形である。古い時代はすべて円形であるが、室町時代後期から変形のものが出てくる。八角のもの、六角形のものがあり、桃山時代には、四角形の四方釜が流行して利休好となっている。

羽

釜の羽は、釜をかまどや座敷の風炉にかけるとき、その縁にかけるために釜の胴部の外縁を一廻りする輪のことである。釜は元来実用の炊飯釜から発達したもので、普通はかまどにかけていた。茶の湯においては、歴史的にははじめはすべて羽釜であったと思われる。その後、茶室の変化によって炉にかける釜が多くなり、羽が不要になってきたので羽のない釜が多くなり、また羽を落としたり、はじめから羽落ちの形を造るようになった。

なお羽の形にも次のような変化がある。

一文字羽—羽が胴の付け根にほとんど直角になっていて、横に一文字にのびたもの。筑前芦屋釜に多い。

折羽（直線）—一文字にのびた羽がほとんど直角に下方に折れたもの。角羽の名がある。博多芦屋にある。

折羽（曲線）—折羽が直角でなく、胴の付け根からすぐに曲線をつくって下方に向かうもので、しころ羽というのもこの類である。筑前芦屋に多い。

スカシ羽—しころ羽を上下反対につけた形で、さきが上方に向く。

なお羽落ちは羽を打ち落としたもの。毛切は羽の位置に筋状のものをつくったものを言う。

底

釜は鑄鉄であるために、火にかけたとき、底をいためることが多い。それで古い遺品には生ぶ底のものほとんどない。いたんだ底を造り変えるとき、使用する茶人の好みによって変更することもある。筑前芦屋釜の底には本来煙返しという輪があったというが、底を入れかえた替底では、ほとんど見られない。底には丸底、角底の形態のほかに、茶人の好みによるものが利休底、道安底、織部底、遠州底と四通りあるといわれる。

利休底—丸くとがり気味。

織部底—底の面のとりかたが高い。

道安底—底の面の角に丸みがある。

遠州底—底の面のとりかたが低い。

鑲付

鑲付は、釜の胴の両側につけられて、釜とともに鑄造され、その中央に穴を空けこれに鑲を通すものである。鑲付は釜の重要なポイントであり、装飾の少ない茶の湯釜の部分では装飾的なところであり、その形式、または胴に付けられた位置により、時代の推定、産地などを推定するのに大切な要素になっている。多種多様な鑲付があるが、分類すると次のようになる。

鬼面鑲付—この鑲は筑前芦屋をはじめ、他にもこれを模したものが多く、茶の湯釜の鑲付の主流をなすものである。同じように見えても、細部は少しずつ異なっている。大体の形は、中国古銅器に見ることができるが、釜に付けられた鑲も中国よりの伝統をひいたのかもしれない。中国に近い九州の芦屋釜は、何らかの形で中国の影響を受けていたと思われる。

あずまら鑲付—「あずまら」というのは「竜の事」と言われており、本来は龍紋であるべきだが、事実は竜よりも獅噛みの形の方が近い。この獅噛みの形は、中国の唐代や我が国の奈良時代の器に多く見られる。茶の湯釜でも各地の窯に付けられるが、天命釜に多い。

遠山鑲付—つまみ鑲付というのも、この遠山形のものと言うようである。頭が高く、下の尾の方が長く流れる柔らかい山形のものであるが、山の途中にくびれのあるものが天命釜に多い。

常張鑲付—「上張」とも書く。形は上部が外に張ったところがちょうど銅印等の鶏頭鈕に似たところがある。天命釜によく用いられた。形姿からいえば、「上張」と書いた方が適切かもしれない新羅系の形といわれる。

和様鑲付—純日本風の鑲付で、松笠、茄子や、鶴、筆、貝、竹節、などさまざまなものがある。前の四者の鑲に比べて優雅なもので自然の植物、動物等を応用している。

蓋

釜の蓋の大部分は唐銅（銅と錫の合金）で、鑄鉄の共蓋は少ない。元来、我が国の炊飯用の釜は木製蓋が用いられたため、茶の湯の釜だけが金属製である。紹鴞時代の釜は鉄共蓋で利休は唐銅を好んだと言われているがさだかではない。

釜の肌

釜の優劣は肌の美しさと言ってもいい。産地や作家によって肌の風合いは違っているが、大きく分けると次のような種類がある。

岩肌、荒肌、砂肌、絹肌、鯨肌、霰肌、ささら肌、弾き肌、袖肌、などがあるが、固定した名称ではなく、それぞれの肌の程度によっても言い方が違う。

装飾文様—釜の装飾文様は、釜の胴廻りにつける鑄出しの文様で、篋で外枠の内側に文様を彫ったり、型押しなどで文様を付けた。篋で文様を描く事は、和鏡の技法と似ているので、その文様と類似点を見る事ができる。芦屋釜の山水図、海浜図、松林図などは和鏡に似ているが、和鏡よりも写実的になっている。型押しの文様としては、巴文、七宝文、亀甲文等が多いが、霰、雲などの粒文も型押しの技法である。

芦屋釜

芦屋の釜を製作した芦屋は、筑前国（福岡県）遠賀郡芦屋の地で、現在も金屋町の名が残っている。芦屋釜と言えば茶の湯釜では最も優れた釜を数多く出している日本の代表的な釜である。芦屋の釜の起源は定かではないが、遺品・文献等からみても永正年間（1503~）以前と推定される。

古い芦屋の釜の特徴は、第一にその製作方法が「挽き中型」である。次にほとんどが鬼面鑲付であり、この付き方が胴の中央辺にあるものが概して古く、肩に近いほど時代が新しいと言われている。第三に、肌が鯨肌、絹肌等でなめらかである。これは文様をよく見せるためかもしれない。

装飾文様をほどこすのも芦屋釜の特徴で、州浜・松原等の水墨画を思わせる風景の図が初期に多く、霰地の作が出、次に霰地の中に円文をつくって、その中に動植物等をえがくことも出てくる。霰が羽にかかったものは古く、羽の上でとまり霰の帯をつくるものは時代が下がる。植物文でいえば、単一文様の図が古く、複合的な物は時代が下がる。

【芦屋釜の分類】

筑前の芦屋釜は、室町時代末期まで隆盛をきわめていたが、桃山時代にはいって衰退した。芦屋釜の分類としては「肥前釜（利休時代）、越前釜（東山時代）、伊勢津釜（太閤時代）、石見釜（太閤時代）、播磨釜」がある。

天命釜

天命釜は天明釜とも、天猫釜とも言う。天命の地は下野国（栃木県）佐野にあり、西の芦屋釜に対する関東釜の製作地である。天命釜の起源については、芦屋釜と違って伝説らしいがかなり詳しい歴史がある。藤原秀郷が天慶三年（九四〇）に東征するときに五名の鑄工が随行し、軍器の鑄造を始めたのが、釜製作の前駆と伝えられる。天命釜の特徴は、大体が甑口であり、遠山鑲付をつけ、地紋がなく、肌は自然の荒肌、挽肌、弾き肌な肌づくりをする。肌の変化、装飾文様がないことから、異形の形姿と共に、この釜の特色である。時代が下がると、鑲付も種々の和様のものが出てくる。霰釜は、芦屋と違って、霰の粒が少し荒い。

京釜

京釜のはじまりは、安土・桃山時代に織田信長・豊臣秀吉等の武将が茶の湯に感心をもち、武野紹鷗・千利休等の茶人による茶席が用意されるようになり、それぞれ自分の好みの釜を求めるようになり、釜作の工人があらわれたと思われる。その工人達が新しい組織をもって集合したのが三条釜座である。

西村道仁—道仁は天下一を号し、紹鷗の釜師であった。経歴ははっきりしないが、その釜は変形荒肌で地紋のあるものが多い。

辻与次郎—西村道仁の弟子といわれ、秀吉時代に利休好みの阿弥陀堂釜、雲龍釜、四方釜などを作った。与次郎の釜の特色として、鋭いタッチの鬼面鬘付を多く用いている。「羽落ち」釜を得意とし、焼貫もはじめた。これによりむっちりとした独自の趣が生まれた。

この他、桃山時代末期から江戸時代初期にかけての京釜の作者として、織部釜師、名越弥右衛門、安見与兵衛、西村弥市郎、飯田左衛門、西村弥右衛門、同九兵衛、同弥市郎、湯浅嘉右衛門、同五郎左衛門の九人があげられている。このうち、名越弥右衛門は古浄味のことである。

名越家—名越家を以て釜師中最古の家系と号している。名越家で桃山時代以降の著名な釜師をあげると、名越善正（徳川家康の釜師と言われる）、名越三昌は浄味というが、代々浄味を称するので、古浄味という。京都名越家の初代になる。三代名越昌乗は元禄時代の人で、釜以外にも風炉なども作った。釜は細かい綺麗な肌のものといわれる。四代名越三典、三典浄味という。享保時代の人で、釜の製作というより、極めや釜座につくしたといわれる。これ以後はあまり栄えていない。

下間荘兵衛—初代政勝は三典浄味の門人。名人にして名越家一門の代作をしたといわれる。

西村家—西村九兵衛は、道仁の子という説がある。与次郎に次ぐ元伯宗旦時代の上手といわれ、四方釜、裏甲釜、裏甲釜等の作あり。生釜で肌を仕上げ、砂肌、中荒肌を得意とする。二代西村道弥は江岑時代で古道弥という。砂肌が多い。三代西村道也は西村家第一の上手といわれる。釜肌は中荒肌である。四代西村道翁は爺道翁とよばれた。

大西家—二代大西浄清は大西家随一の名人。後に江戸に下り幕府の釜師となる。釜作は薄作りの作に巧み、多く砂肌という。子孫現代にいたる。

奥平了保は、十代浄雪の子で、全ての面で名人といわれる。刷毛目の釜が多い。

江戸釜

江戸名越家—名越家昌は京より江戸に下がり、代々幕府の御用釜師になる。作品はあまりない。

堀家—堀山城は、初代浄栄。京都の名越三昌の次男。釜作は砂肌で、荒く、変わり形が多いという。

江戸大西家—大西定林は、江戸初代、作風は多様性にとみ異形の釜が多い。しかしその釜肌は綺麗であり、宗偏好みの風炉釜、四方釜などを作る。

地方釜

宮崎寒雉—初代は浄清の弟子になり、加賀前田家に仕える。作は総体に薄作で、色付けに特色がある。肌は砂肌である。